



心の時代



「大化の改新って何だっけ？」高三の九月の発言でした。少なからず焦りを感じました。八月終わりまで担当が日本史を教えていたはずでした。どうしてこんな発言が出たのかを考えました。あれほど「教えすぎ」になるなど言ったはずでしたが、なまじ日本史を知っていると語りたくないのでしょうね。私は一通り実況中継(テキスト)を終えるまでは解説をしながら一緒に読み合わせをして、そして、実況中継の穴埋めで声に出して読み、書きなさい。そして、間違えたところを再度声に出して読み書きなさいという指示を出していました。これまで有名な先生をお呼びして板書も行いましたが講義形式では頭に入らないことを実感してきました。そこで一冊を徹底的に読み込む方式に変え、それなりの成果が出てきました。

「教えすぎ」に続いてもう一つ、内容が理解していないという懸念が生じてきました。書いてある内容が理解していないから暗記に走るのではないだろうかと思いました。中学までの基礎知識がないこと国語力が低下していることが考えられました。

歴史の単語だけを頭に入れても因果関係がないと、丸暗記は三日で忘れてしまいます。私が何も見なくても話が出てくことに生徒は不思議に思ったのでしょうね。それは暗記せずに理解しているからです。もちろん細かいことは見直さなければなりませんが、大筋は頭に残っています。それは出来事が起こった時代背景を考え、どうしてそれが起こったのか、その後どうなったのか、そしてその影響で何が変わったのかを意識して見ているからです。そして歴史が教えてくれる、学べることは多々あると感じているからです。

これはまずいと気が付いた私は、膝が痛く教壇にずっと立てなくなっていましたので現場は各講師に任せていましたが、それどころではないと思い立ち、授業をすることにしました。私の授業では「なぜ」「どうして」を繰り返して訊くようにしています。私は十何年ぶりに日本史を教えるにあたり、最新情報を調べ、ノートを作り教壇に立つことにしました。私は何の授業でも授業ノートを作ります。マンネリが嫌なことは事実ですが、作ったものを現場で試し、使えるかどうか考え、いつも新鮮な気持ちでないと授業に臨みたくないのです。

志学ゼミは少人数ですから私が話をして板書をした後、話を反復して生徒が前に立ち、穴埋めをしながら説明をしてもらいます。人前で説明をすると自分は何が分かり、何が分かっているのかが良くわかります。九月、話題が出た大化の改新から土地と人々のかかわりの変遷を現代まで大きく話をした後、何が分からないのかを改めて訊きました。「藤原さんがたくさん出て来て分からない」という声が出ました。「光る君へ」を大河ドラマでやっていますが知っている者は誰もいません。進めても興味関心がないのでそれっきりでした。

では藤原氏はどこから始まったのか、大化の改新で中臣鎌足が天皇から藤原を賜ったという話。それからどの家がどうして繁栄をしたのか、そして衰退する話を大きく話し、その後で細かい歴史の話をしました。一回にはそう多くは頭に入りそうにはありませんので、毎日のように少しずつ進めています。今から間に合うのか？間に合わせなければなりません。焦って問題を解くと解けませんし、なまじ通史が分からずに部分的な知識を入れることは危険なのです。土曜ごとに政治史が終わったところからその時代の文化史の資料集を見ながら声に出して見直すことを講師にも再度指示を出しました。

「大化の改新って何だっけ？」といった高三生に、「あのとき大化の改新が分からなかった私がこうなったといういい合格体験記が書けるね」と励ますと「そうなるかな」という顔をしましたので「そうならなくてどうする？」と励ましました。